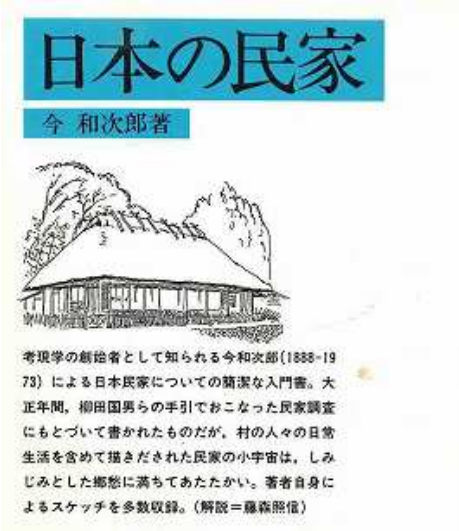
その本はそこに

読書案内 9　～ 田舎への郷愁 ・ 生活と器の一体～



目次　■日本の民家

■Ⅰ. 田舎の人たちの家
・都会の家との違い
・水田の村の人たちの家
・畠の村の人たちの家
・山の村の人たちの家
・漁村の村の人たちの家
■Ⅱ. 構造について
・開墾地移住者の家
・土地との関係
・我国の民家の特徴
・屋根
・一般構造
■Ⅲ. 間取について
・民家の間取の歴史
・農家の間取
・地割と家との関係
・郊外町の生成
・処女郊外住宅地への同情
■間取の由来考
■採集　1. 津軽の農家～
68. 薩摩揖宿の農家
■調査
・相模国津久井郡内郷村
・武蔵国秩父郡浦山村
・武蔵国南多摩郡恩方村

『日本の民家』今 和次郎（著）❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖

■この本は、なるだけどんな人へでも興味をもって田舎の生活や家屋のことを知ってもらえるようにと心掛けてかいたもので、都会の人たちへは田舎のことを知ってもらうために、また田舎の人たちへは他の地方のことを知ってもらうために役立てばと思ってかいたそうです。

■その土地の自然条件ばかりでもなく、その土地の精神的にもっている条件や、社会の事情などによっても変わって作られるに至るものだと考えねばならぬもので、自然の関係からばかりではどうしても判断のつかない不思議なことが沢山ある。（下記は採集 1～68 のほんの一部抜粋）

❖❖❖津軽の農家❖❖❖この家には、冬四ヶ月の間壁の半分までを雪に埋めて暮らす人たちが住っているのだ。寒いのと暗いのと、焚火の煙とで、眼を悪くし、またひとりでに不活発になりなまけるようになる。大人たちは秋に春にこの野原で仕事をしているとき、北の国の子供たちはただ空想の国におかれているだけなのである。私はこの土地で生まれ、この土地で育ったのだから、それらの事をよく知っている。

❖❖❖伊豆大島の住家❖❖❖部落のうちには坂道の道路をうねらしていて、家々の垣根は防風の石垣が積まれて出来ている。そしてそれらの石垣の上には花が植えられ、蔦がはわされたりしている。飲み水は、稀に所々に湧き出している泉を、共同井戸として用いているのだが、そこへ朝夕女たちが水桶を頭上に載せて汲みに来る。

❖❖❖木曾街道の豪農の家❖❖❖広い土間をも包含して、台所も炉も、がらんとした中に構えられているのである。大きな屋根を支える見事な梁が、一間間隔に走っているのがここで見上げられるのである。こせこせしない山国の人々の豪放な気性がそこでしみじみと感じられるのである。

❖❖❖紀州熊野の農家❖❖❖熊野は有数な杉の産地なので、熊野の家々の屋根はほとんど全部杉皮葺である。それに石を置いてある。石も多いからだ。石垣を立派に作っているのもこの地の特色である。絵の如き家々は谷の間に点々している。それらの眺めは実に建築の詩である。それは旅行者にのみ与えられる楽しみである。熊野の家々の印象はわすれられない。

■解説（藤森照信）❖地理・家屋・生活・人間、それらの関係を明快に解きほぐしながら、それらが一緒になって生まれてくる全体性を描く。読み進むうちに、田舎を知らない人はまるで話に聞いた世界に自分も入り込んで暮らしているような気持になり、田舎を知る人は村に向かって駆け出したいような郷愁にとらわれる。

❖現在、民家を見る視点は美と歴史に収束している。生活をこととする民俗学と器をこととする建築学は、彼の仕事を学問的には未分化、未発達なものとして中間に置き去り、先に進んでいった。民家に対する重要文化財の指定で、本書に登場したものはごくわずかしか残っていない。ほとんど消えた。理由は簡単で、今和次郎が好んで採集したようなものは歴史的にも美的にもたいしたものではなかったからである。

❖今和次郎が生涯を通して立脚したのは、仮小屋のシーンから文学性を抜いた物件としての仮小屋だった。こういうと、民芸と似ていると思われるかもしれないが、ちがう。民芸運動は、農民の制作物の中にあくまで、美を見ていたが、彼はちがって、農民の工作物の中に工作そのものというか、美の発生以前の、人と物との初源の関係の面白さとせつなさ、のようなものを感受していた。

❖美術学校に入って以来の今和次郎の目玉と脳みそが、家とかデザインとか物を作るとかの領分を、ニヒルに落ちたり元気になったりしながら、下りに下っていって届いた一番の底がここだった。おそらく、そこまで届いた世界で最初の一人だったと思う。そういう人が三十四歳の時に書いた。　　（案内：黒野晶大）